

タクトに込める情熱

下野竜也

「そこは、少しテンポを速めにお願ひします。」

「リズムを、もつとはつきりと表現してください。」

広い音楽ホールの真ん中で、まだ若い男の人が、汗びっしよりになりながら、リハーサル中のオーケストラに次々と指示を出しています。彼は、手に持った一本の指揮棒（タクト）を、時には大きく、時には小さく振りながら、様々な表情と表現で曲を作り上げていきます。実は、この人こそ、鹿児島で生まれ育ち、世界的指揮者として活躍している、下野竜也さんなのです。



【下野竜也さん】

（写真提供 読売日本交響楽団）

【MBCユースオーケストラ】

一九六四年（昭和三十一年）、MBCジュニアオーケストラとして発足。一九八五年（昭和六〇年）に、現在の名前に変更した。

下野さんは、一九六九年（昭和四十四年）、鹿児島市に生まれま
した。鹿児島市立田上小学校の五年生の時にトランペットと出会っ
た下野さんは、※MBCジュニアオーケストラ（現MBCユースオ
ーケストラ）に在籍しながら、トランペットの練習に励みました。
実は、下野さんがトランペットを始めたきっかけは、キラキラして
いるトランペットが、高級なおもちやのようで、「いいなあ」と思
ったことからだそうです。その後、たくさんのおーケストラの曲に
出会う中で、音楽の面白さに気付いていった下野さんは、朝から晩
までトランペットの練習に没頭しました。

鹿児島市立武中学校たけの中学生となっていたある日、ジュニアオー

【関連年表】

- 一九六九年 誕生たんじょう
- 一九七六年 田上小学校入学。
- 一九八二年 武中学校入学。
- 一九八五年 甲南高校入学。
- 一九八八年 鹿児島大学入学。
- 二〇〇〇年 東京国際音楽コンク
ール優勝。
- 二〇〇一年 ブザンソン国際指揮者
コンクール優勝。

ケストラの練習の中で、下野さんは不思議な体験をします。その時は、いつもの先生ではなく、他の先生が指揮棒を振ることになりました。すると、これまでの練習通りに曲を吹いていた下野さんに、指揮者の先生から、

「トランペット、その部分は少し音符を長めに吹いてください。」と指摘があったのです。「この部分は確か、いつもの先生には短く吹いてと言われていたはず…。」

なんだかもやもやした気分になりながらも、下野さんは言われた通り、その部分を長めに吹きました。「なんで指揮の先生によって言うことが違うのかなあ。同じ曲なのに。」

それからしばらくして、同じ曲を別々の指揮者が演奏したレコー



【小学生当時の下野さん】
(一番左が下野さん)

ドを聴き比べてみた下野さんは、まるで違う曲を演奏しているように聴こえることに驚きました。指揮者がその曲をどう作りたいかによって、演奏が大きく変化することに気付いたのです。

下野さんは、それから、お小遣いをためては指揮者用の楽譜（スコア）を買い、「この曲、僕が指揮したらどうなるだろう。」と考えるようになっていきました。

一九八六年（昭和六十一年）、甲南高校の吹奏楽部に所属していた下野さんは、病気になってしまった顧問の先生の代わりに、鹿児島県吹奏楽コンクールで指揮者を務めます。生徒の指揮でコンクールに出場することは、めったにないことなのですが、下野さんは

【鹿児島県吹奏楽コンクール】

鹿児島県の代表的な吹奏楽の大会。

小学校から一般まで、二〇〇近くの団体が、九州大会をめざして出場する。

立派りっぱに大役をやりとげました。

一九八八年（昭和六十三年）に高校を卒業そつぎようした下野さんは、鹿児島大学教育学部に入學し、音楽の先生になるための勉強に取り組みます。そして、大学一年生の中から、所属していた鹿児島大学管弦楽団げんがくだんや、※ J. S. B. 吹奏楽団の指揮をとる機会きかいに恵まれ、プロの音楽家や指揮者の指導しどを受けることもありました。大学四年生となった一九九一年（平成三年）には、J. S. B. 吹奏楽団を吹奏楽コンクール全国大会まで導みちびき、そんな日々の中、下野さんの「指揮者になりたい」という情熱じょうねつは、高まっていくばかりでした。しかし、プロの指揮者として活躍することが、どれだけ大変たいへんなところかも、下野さんには、当然とうぜん分かっていました。今まで学んできた

【J. S. B. 吹奏楽団】
一九七五年（昭和五〇年）結成。現在も、県内の演奏会やコンクールなどで活躍。

ことを生かして、教師きょうしという道みちを選えらぶか、それとも、苦勞くろうするこ
とが分わかっているだけでもプロの指揮者しきしやになる夢ゆめを追おい求もとめるか。何日も
何日も悩なやみ続つづける中、大学を卒業して自分の人生を決める時がやっ
てきます。

自分のことだけでなく、家族のこと、鹿児島にいる先輩せんぱいや友人と
の関かん係けいが今後どうなっていくのか。そして何よりも指揮者として自
分がどこまで通用するのか。それでも下野さんの心は、「指揮者の
道みちを歩あもう。」
と決めました。

「人生の中で、一度は、やりたいことをやってみよう。」
という強い思いが勝ったのです。あれだけたくさんの不安ふあがあつた



【考えてみよう】

もし、自分が下野さん
の立場たちばだったら、どのよ
うに考えるだろうか。

にもかかわらず、「よし、やろう。」という決心をしてからは、「どうなるんだろう。」という不安よりも、ワクワクする気持ちの方が強くなりました。

大学を卒業した下野さんは、指揮者を目指し、東京の桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室で、本格的に指揮の勉強を始めました。しかし、音楽が専門の大学で勉強していると、自分が周りの学生から四年も五年も遅れていることがよく分かります。最初は焦ることはかりでしたが、音楽の世界へのあこがれだけは常に持ち続け、そのあこがれにどれくらい近づけるかを考えながら、勉強を続けました。その後、世界的に有名な指揮者である*秋山和慶さんに弟子入り

【考えてみよう】
下野さんの姿勢から、あなたは何を学ぶだろうか。



【秋山 和慶さん】

一九四一年（昭和十六年）生まれ。世界の数々の交響楽団の指揮を務めた。

すると、練習を見学したり、レッスンを受けたりしながら力をつけていき、そうして勉強を続けていくうちに、下野さんの周りには、様々なつながりができていきました。だんだんと東京で指揮をとる機会も増えていき、アマチュアオーケストラやお母さんコーラスなどで指揮をさせてもらえることがうれしくて、どんな小さな団体でも、きちんと勉強して指揮をとるようにしました。そうやって下野さんは、指揮者としての道を、一步一步進んで行ったのです。

そして、ついに二〇〇〇年（平成十二年）、第十二回※東京国際音楽コンクール指揮部門で、下野さんは見事に優勝を果たします。

さらに翌年の二〇〇一年（平成十三年）には、フランスで行われた第四十七回※ブザンソン国際青年指揮者コンクールでも優勝し、こ

【東京国際音楽コンクール指揮部門】

世界的にも注目される指揮者のコンクールで、一九六七年（昭和四十二年）の創設以来、三年に一度ずつ開催されている。

【ブザンソン国際青年指揮者コンクール】

一九四八年創設。長い伝統を誇り、国際的にも名高いコンクールの一つ。

世界的に有名な指揮者である小澤征爾さんも、このコンクールの優勝者。

の二年連続れんぞくの優勝ゆうしょうという快挙かいきよが、世界から注目ちゅうもくされるきっかけになりました。二十二歳さらいからの下野しものさんの挑戦ちようせんは、十年をかけて、事に花開いたのです。

下野さんは、インタビューの中で、

「自分の思う道を進もうとするとき、すぐには、自分の思い描おもいている結果けっかにはならないことが多いです。」

と、これまでの体験を踏ふまえて語っています。しかし続けて、

「けれど、地道じどうに努力どりょくしていくことが、何か月後、何年後の自分に必かならずつながっていく、今やったことが数年後役に立つと思えば、今の自分がなまけるわけにはいかないんです。日々、勉強です。」

とも話してくれました。名声を得てなお、努力を惜しまない下野さんの、とても大切な考え方です。

最後に、これから夢に向かって進んでいく鹿児島県の小学生に、下野さんからのメッセージを紹介します。

「人間は誰でも、好きなことと嫌いなことがあります。好きなことは一生懸命がんばるし、嫌いなことは、みんなしたがらない。でも、嫌いなことの中にも、好きなことを助けられることが必ずあるはずです。そう思えば、嫌いなこともがんばれるのではないでしょうか。」

あなたの好きなことは何ですか。そのことのために、あなたは今、どんな努力をしていますか。



【インタビュー時の下野竜也さん】

【考えてみよう】
自分が得意なこと、苦手なことは何か、振り返ってみよう。